

長崎市における妊婦の風疹罹患歴と風疹 HI（赤血球凝集抑制反応）抗体価について

前田 恵子¹

要 旨 長崎市の1病院に来院した妊婦4670名について風疹の罹患歴の有無と抗体保有率を調べた。妊婦の多くが抗体を保有していた。罹患歴ありと答えた妊婦は年々増加した。罹患歴無しと答えた人もやや減少している。罹患歴無しと答えた人の約半数が抗体検査を希望した。以上のことから、妊婦の風疹に対する認識が高まっていることは事実であるが、本症の危険性に対する認識が充分ではなく今後妊婦への徹底した指導が必要であろう。

長大医短紀要5：9-14, 1991

Key words : 妊婦, 風疹, 風疹 HI 抗体価

はじめに

妊婦が風疹に罹患すると先天異常児を生む可能性が高いことが指摘された¹⁾²⁾。わが国では1964年に沖縄で風疹の大流行があり、これが、1つのきっかけとなって、大きな社会問題に発展した³⁾。

本病が妊婦にとって重要であるにもかかわらず、妊婦の間での流行の実態についての報告は多いとはいえない。著者は、本症に対する妊婦への保健指導を実施するに当り、長崎市で流行状況を把握しておく必要を感じた。

そこで長崎市における妊婦について風疹の罹患歴やその抗体保有率について調査したので報告する。

調査方法

1981年-1987年間に長崎市内の1病院の産婦人科に来院した妊婦4670名のカルテをもととして集計した。

妊婦の初診の問診時とその後次のことを質問し、風疹罹患歴の有無、風疹抗体の検査の希望の有無を記載した。また、検査希望者については、抗体価を測定した。

成 績

1. 調査妊婦の数と年齢分布

合計4670名の妊婦を対象として調査した(表1)。年齢分布についてみると、20-24才までの妊婦は少なく、妊娠適齢期である25-29才の妊婦が最も多く来院しており、ついで年齢増加とともに減少したことがわか

1 長崎大学医療技術短期大学部看護学科

る。このような年齢構成には、年次的変化はみられない。

2. 経産回数別の妊婦構成

表1に示した妊婦について、経産回数別にそれぞれの割合を計算して図1に示した。この図からわかるように、一般に初産の人が最も多く、約50%を占め、回数の増加にともない、その割合は減っている。この構成は年によってほとんど変化していない。以上のことから、調査対象集団は、年齢構成や経産回数の点で安定していることがわかる。

3. 風疹歴の有無

表1に示した4670名について、1)罹患歴の有無 2)罹患経験の記憶なし 3)ワクチン済みの3つの事項についてまとめた。その結果を図2に示した。大変興味あることには、罹患有りの人の割合は1982年頃から増加していることであり、一方、ワクチン接種済みの人はあまり増えていないことである。当然のことながら、記憶無しの人々の割合は年次的に減少している。これらのことは、風疹に対して妊婦の認識が年々高まっていることを示していると考えられる。

表1 調査妊婦数と年齢分布 (%)

年	年齢	≤19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	調査人数
1981		0.0	19.7	52.9	23.1	4.3	0.0	346
1982		1.4	20.1	49.9	24.3	4.0	0.4	802
1983		0.9	19.9	48.6	25.6	4.8	0.1	743
1984		0.6	16.6	51.6	26.2	4.8	0.1	812
1985		1.2	17.3	52.0	24.3	4.4	0.8	729
1986		1.6	17.3	49.8	25.0	6.4	0.0	625
1987		1.8	16.5	49.4	26.6	5.4	0.3	613
計		53	847	2356	1174	227	13	4670

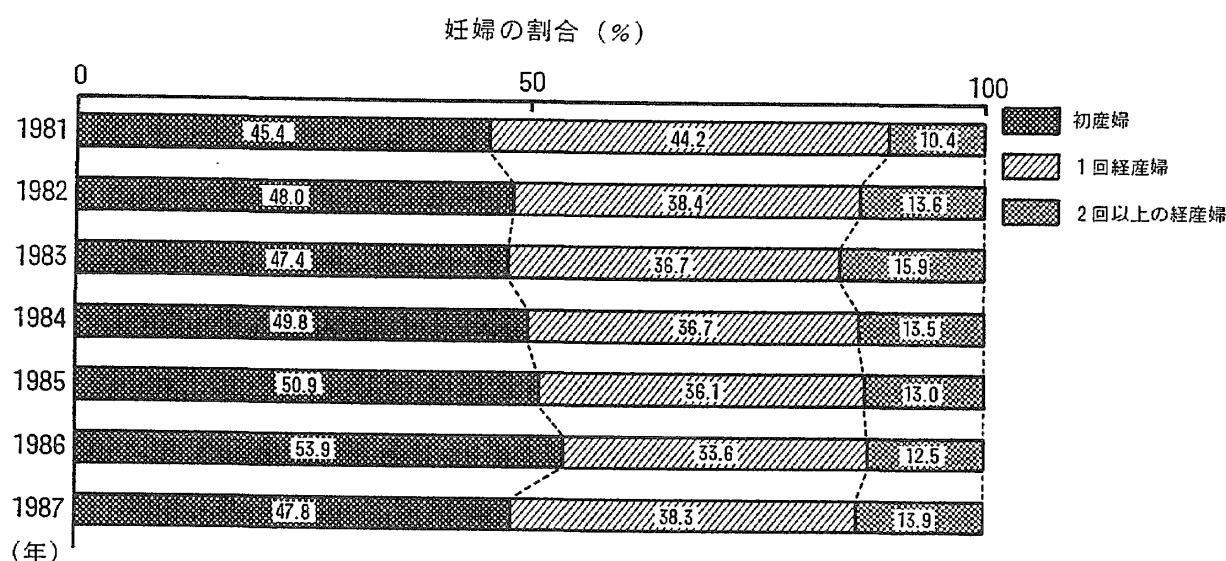


図1 経産回数別の妊婦の割合

長崎市における妊婦の風疹罹患歴と風疹

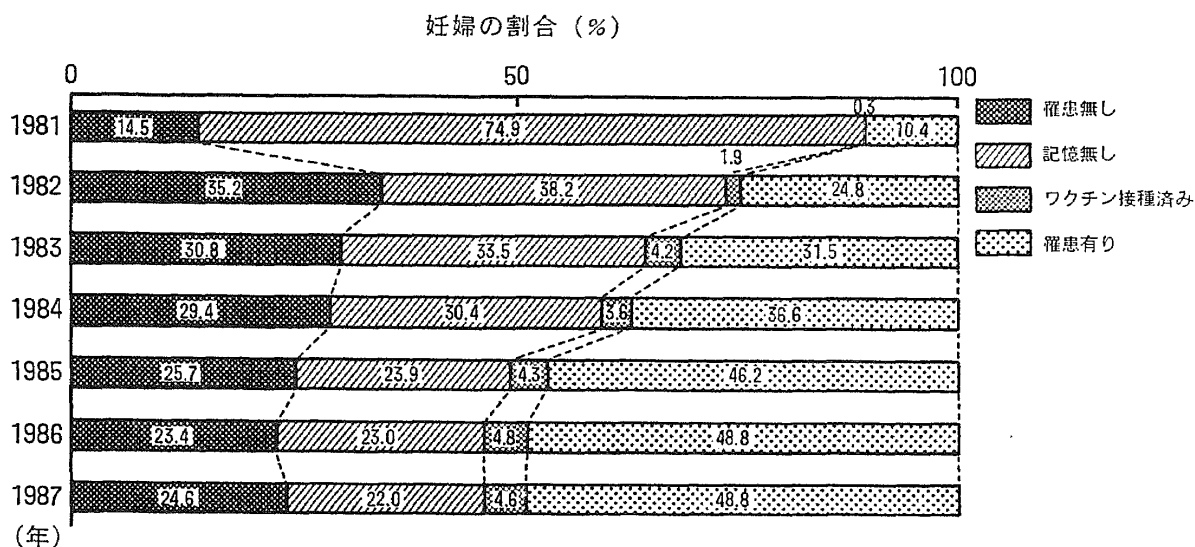


図2 罹患歴の有無とワクチン接種別の妊婦の割合

表2 風疹 HI 抗体価保有者率の年次的変化

年	抗体価調査人数	抗体価保有者数と率(%)
1981	212	189 (89.2)
1982	610	467 (76.6)
1983	481	346 (71.9)
1984	475	298 (62.7)
1985	354	226 (63.8)
1986	259	180 (69.5)
1987	234	170 (72.6)
計	2625	1876 (71.5)

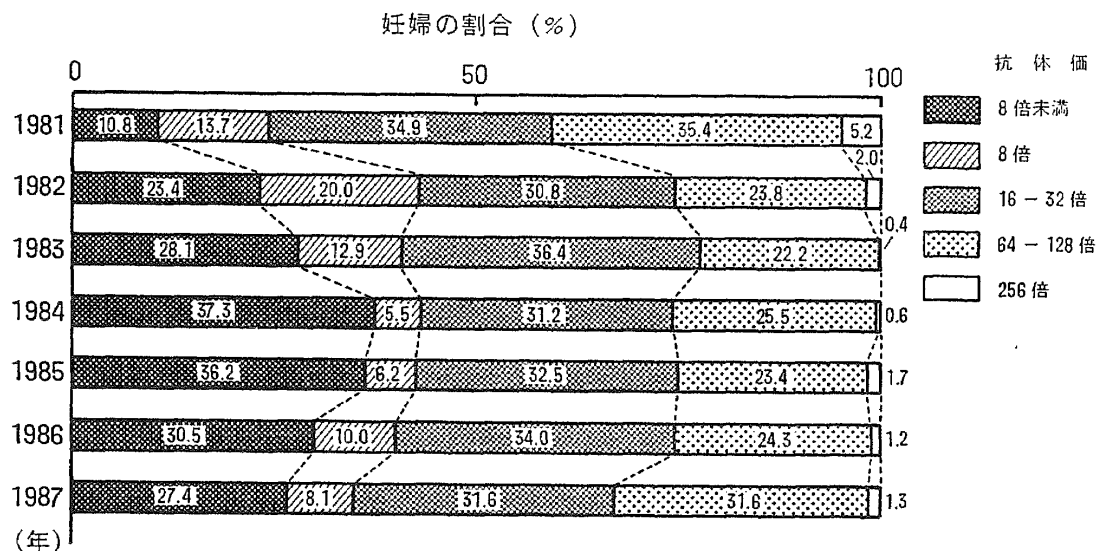


図3 風疹 HI 抗体価の年次的変化

4. 風疹抗体者保有率の年次的変化

妊婦 2625 名を対象に検査した。ここで抗体保有者とは抗体価が 8 倍以上 (>8) の妊婦を示す⁴⁾ (表 2)。抗体保有率は、1982-1987 年までは約 70% と高率に感染していることがわかった。1981 年ではやや高く 89.2% となっている。

5. 抗体検査を受けた妊婦の抗体価の分布の年次的変化

検査を受けた 2625 名について抗体価別にそれぞれの妊婦の割合とその年次的推移を図 3 に示した。8 倍以上の抗体価を持った人が

約 70% を占めている。この抗体保有率は年次的にはほとんど変化していない。

6. 風疹罹患歴の無い妊婦の抗体価

次に罹患経験無し (未罹患患者) と答えた妊婦の中で抗体検査を受けた人と受けない人の割合を示した (表 3)。検査率 (検査を受けた人の割合) は 1981 年には 30% と低いですが、その後は約 90% から 50% へと減少して来た。このゆるやかな減少傾向の原因はわからないが、未罹患患者でもやはり、かなりの人が、感染している危険性を考えに入れていることがわかる。

表 3 罹患歴の無い妊婦の風疹 HI 抗体価検査率

年	罹患の無い妊婦数	検査
		数率 (%)
1981	50	15 (30.0)
1982	282	249 (88.3)
1983	229	184 (80.3)
1984	239	188 (78.7)
1985	187	126 (67.4)
1986	146	84 (57.5)
1987	151	75 (49.7)
計	1284	921 (71.7)

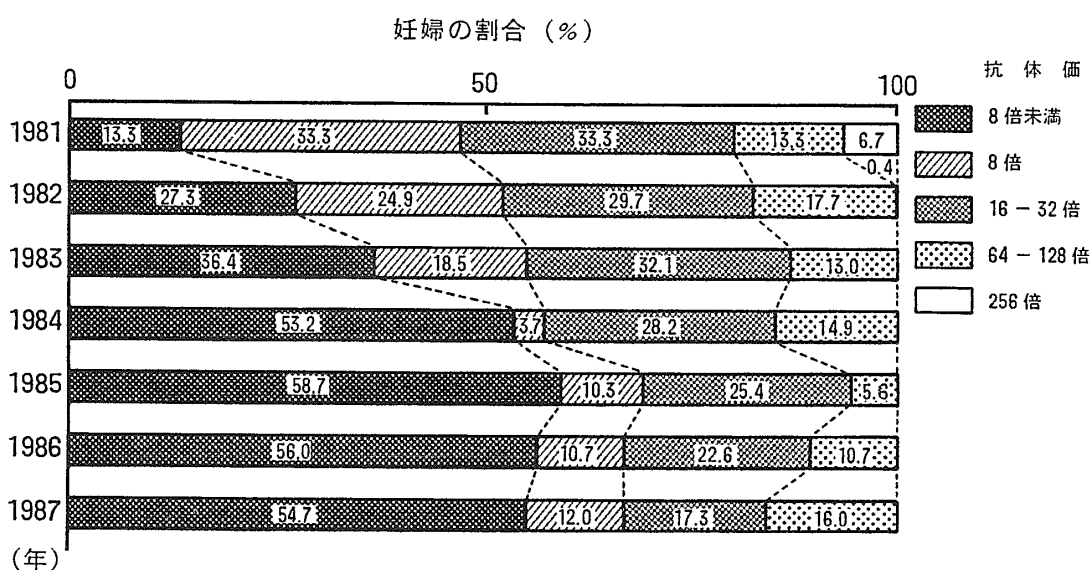


図 4 罹患歴の無い人の風疹 HI 抗体価別分布

さらに末罹患患者の中で検査を受けた人について抗体価別にそれぞれの割合を図4に示した。8倍未満の抗体価を持った人は1982年から増加し、1985年以降はあまりかわらず約50%となった。逆に抗体価8倍の人は1981年から減少している。16-32倍の人でやや年次的に減少済みであるが64-128倍の人は年次的に変わらない。以上のことから罹患していないと考えている人もかなりの感染をうけていることがわかる。

考 察

風疹の罹患歴の有無について、有ると答えた妊婦は1981年約10%から年々増えて、1987年には約50%に達した。一方、罹患歴無しの人もやや減少する傾向がみられた。これはすでに述べたことではあるが、妊婦の風疹の重要性に対する意識が年々高まっているものと思われる。罹患歴の無い妊婦の検査率は、年々減少してはいるものの50%の人が1987年に検査を受けていることになる。この点からみても本病に対する意識は高いことは事実であろう。罹患歴無いと答えた人の抗体価についてみると、8倍以上の抗体保有者は年次的に減少しているが1984年頃以後でも約50%は保有している。これは、不顕性感染者ではないかと思われる。また、1984年頃までに抗体価が8倍未満の人がふえてい

る。これはやはり風疹の罹患歴の無いことをはっきり記憶しているものが増えていることを示し、この面からみても妊婦の風疹についての意識が高まっていることが考えられる。しかし、これを見方を変えれば風疹を軽くみている妊婦が多いことを暗示しており、今後、さらに詳しい風疹の症状や胎児への影響を指導していくことが必要であると考えられる。

謝 辞

この論文の御校閲をたまわった産婦人科医今道節夫先生に心からお礼申し上げます。

文 献

1. 竹内正七, 大桃幸夫: 風疹-風疹未感染婦人に対する Vaccine 療法-, 産科と婦人科, 1986, 53: 677-678.
2. 桑原惣隆: 風疹-高風疹抗体価妊婦の予後-, 産科と婦人科, 1986, 53: 684-686.
3. 坂元正一, 倉智敬一編集: 総合産科婦人科学, 医学書院, 東京, 1987, pp676-677.
4. 木川源則: 風疹-妊婦における風疹抗体価の判定, 産科と婦人科, 1986, 53: 681-683.

(1991年12月28日受理)

前田 恵子

Rubella infection and HI antibody in pregnant women
in a hospital in Nagasaki City.

Keiko MAEDA¹

1 Department of Nursing, The School of Allied Medical Sciences,
Nagasaki University.

Abstract The history of rubella infection and the frequency of the positivity of rubella antibody were studied in 4,670 pregnant women examined at a hospital in Nagasaki City. Many pregnant women were positive for rubella antibody. The percentage of pregnant women who reported a history of rubella infection increased each year, and the percentage of those who reported that they had no history of rubella slightly decreased after 1982. About half of those that did not have a history of rubella wanted to undergo a rubella antibody test. These results suggest that although understanding of pregnant women about rubella has improved, the risk of the disease is not yet sufficiently recognized. More careful guidance for pregnant women concerning rubella is considered to be needed.

Bull. Sch. Allied Med. Sci., Nagasaki Univ. 5 : 9-14, 1991

Key words : Pregnant women, rubella, rubella antibody